Divadlo 501「きんいろの髪のお姫さま」撮影　Mari Odajima

2024年2月発行　冊子構成 なの工房

舞台手話通訳つき公演の実践

作成　NPO 法人 アートワークショップすんぷちょ
協力　特定非営利活動法人 シアター・アクセシビリティ・ネットワーク

聴覚障害者の鑑賞機会を創出するための舞台手話通訳普及事業
（公益財団法人市民文化事業団　令和5年度「持続可能な未来へ向けた文化芸術の環境形成助成事業」）

はじめに

NPO 法人アートワークショップすんぷちょ
代表　及川多香子

舞台手話通訳を初めて知ったのは、2019 年に TA-net 主催で養成講座が開催された時でした。それまでテレビなどで見ていた手話通訳のイメージとは全く違う通訳者の表現力と、舞台上での一体感に惹き込まれました。

当団体のスローガンである「すべての人にアートを」は、舞台鑑賞や創造の機会があらゆる人に開らかれている環境づくりを目指すというものですが、「すべての人に」を実現させるために、具体的な配慮や工夫は、どのように準備できるか、がとても重要だと考えています。

じっと座って鑑賞することが苦手な人には、リラックスできるスペースを。

先の見通しが立たないと不安がある人には、お芝居の流れが分かる事前資料を。

正解はありませんが、試行錯誤を重ねていくプロセスが、社会全体で舞台鑑賞のアクセシビリティを上げていく一歩だと考えます。

このブックレットをきっかけに、舞台鑑賞があらゆる人に開かれる未来に向けて、試行錯誤や取り組みが広がっていくことを願います。

最後に TA-net の皆様、アーティスト、このブックレット作成に携わる皆様に感謝申しあげます。

NPO 法人アートワークショップすんぷちょとは

2008 年設立、2014 年 NPO 法人化。「すべての人にアートを」をスローガンに年齢や障害の有無問わず、多様な人が芸術に触れ、交流することを目的にワークショップやフェスティバルの開催、舞台公演を行っている。

子どもも、おとなも、手話で一緒に楽しむ未来！

特定非営利活動法人 シアターアクセシビリティ・ネットワーク
（TA-net）
理事長　廣川麻子

英国で初めて舞台手話通訳つき公演を観たのは 2008 年の「レ・ミゼラブル」でした。それから 10 年後、日本で養成に取り組み、この5年間、実践を積み重ねてきました。仙台で養成講座を 2019 年 7 月に行い、様々なご縁が繋がってようやく 2022 年に実践の機会を持つことができました。

英国ロンドン南部にポルカ劇場という子ども向けの劇場があり、手話通訳つき公演をろうの子どもたちが楽しそうに観ていたのが印象的でした。こういった環境を日本でも作れたらいいなと思っていたので、仙台で継続して取り組んでくださっていることがとても嬉しく、励みになります。

ろうの子どもだけでなく、ろうの親がきこえる子ども、あるいはきこえるきょうだい、家族と一緒に質の高い作品を楽しむことによって、観劇後の語り合いが豊かなものになります。貴重な機会が今後も続くことを願っています。

特定非営利活動法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク（TA-net）とは

「みんなで一緒に舞台を楽しもう！」を合言葉に活動している NPO 法人です。
観劇支援を行っている公演などを紹介するポータルサイトの運営、
支援方法の研究、実践、人材育成、普及に取り組んでいます。
観劇支援を導入する団体からの相談に対応しています。

舞台手話通訳とは・・・？

舞台手話通訳は、日常会話や会見などの一般的な手話通訳とは違い、作品全体を理解し、ろう者が舞台作品を楽しむために俳優のセリフや感情などを舞台の進行に合わせて同時通訳するものです。

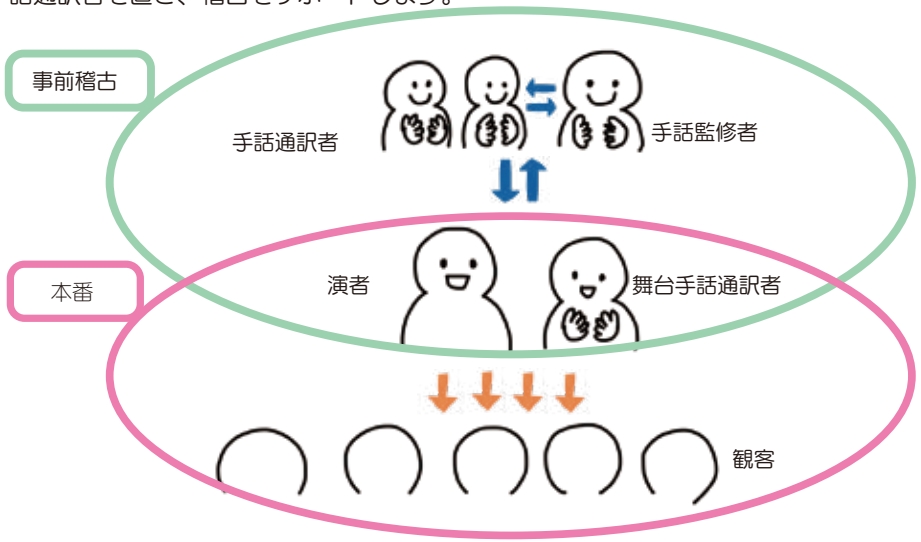
舞台上で出演者の１人として作品に関わるため、専門性や事前の念入りな準備が必要になります。

手話監修ってどんなことをするの？

舞台作品を手話で伝える際に、ろう者が作品を理解し楽しめるよう、適した表現かどうか、ろう者の視点から監修を行います。監修には演劇や手話指導経験のあるろう者や舞台手話通訳の経験が深い聴者が行います。

脚本を事前に確認し、稽古ではキャラクターやシーンに合わせた表現をチェックし、立ち位置や速度の調整なども行います。

また、ろうの監修者、演出家、俳優の意思疎通のために、舞台手話通訳者とは別に手話通訳者を置き、稽古をサポートします。



実践報告
作品について

舞台手話通訳をつけた人形劇
「きんいろの髪のお姫さま」Divadlo 501（ディバドロ）

ヨーロッパの中心、チェコ共和国に古くから伝わる民話「きんいろの髪のお姫さま」。動物たちの言葉がわかる、不思議な力を手に入れた召使いのイジー。きんいろの髪のお姫様を探して旅をする。

大冒険の果てに何が待っているのか？

人形劇の国、チェコ共和国から、演出家・ゾヤ・ミコトバーと、美術家の林由未を招いて、岐阜県を拠点に人形劇などの活動するDivadlo 501の谷口直子が2018年に制作。多くの登場人物を、多様な表現手法と生演奏を取り入れつつ、観客を巻き込んで展開していく。福岡、大分、群馬、栃木、東京、神奈川など、各地のフェスティバルやイベントなどで上演を重ねている。
（上演時間約 60 分）

上演が行われた
イベント

宮城野区子ども舞台芸術祭
フラット（♭）シアターフェスティバル vol.2
～いっしょに いこう ものがたりの せかい～

フラット（♭）シアターフェスティバルは、すべての子どものためのお祭りです！

「劇場で舞台芸術を体験する際のあらゆるハードルを取り除き、観客と劇場をフラットに繋ぐ」という願いを込めて、生まれました。

障害や年齢の違いを問わず、あらゆる子どもを対象とし、様々な表現を楽しめる２日間です。

2023 年は、多くの賞を受賞し、世界各地で活躍する Witty Look のシアターコメディサーカス、重度障害があるお子さんも五感で楽しめる「多感覚演劇」、リアルタイムで字幕を打ち込んだり、ノンバーバルな表現で進行する即興劇、一緒に踊って楽しめるアフリカンドラムのライブなどが行われました。

2023 年 9 月 16 日（土）・17 日（日）
宮城野区文化センター、宮城野区中央市民センター

主催　文化庁　NPO 法人アートワークショップすんぷちょ
共催　公益財団法人仙台ひと・まち交流財団　宮城野区文化センター　宮城野区中央市民センター　仙台市教育委員会

人形劇に舞台手話通訳をつける

東北初の「舞台手話通訳つき人形劇」は 2022 年 9 月に、宮城野区子ども舞台芸術祭フラットシアターフェスティバル内で上演されました。これは、令和4年度　文化庁「障害者等による文化芸術活動推進事業」採択事業である、NPO 法人シアター・アクセシビリティ・ネットワーク（TA-net）の「舞台手話通訳者の人材育成および実践普及、観劇サポート啓発」事業により実現しました。

2023 年は公益財団法人市民文化事業団「持続可能な未来へ向けた文化芸術の環境形成助成事業」により、事前稽古での手話監修と、このブックレットの作成が実現しました。

岐阜と仙台で手話監修を行うにあたり、舞台手話通訳に理解ある手話通訳者を依頼。全国的にも数が少ないため、岐阜の稽古では愛知から。仙台での稽古では、岩手や拠点が東京の手話通訳者が参加しました。

上演までのスケジュール

2023 年の公演時は下記のようなスケジュールでした。助成金が出ない場合は昨年同様の内容で行うつもりでいましたが、手話監修が可能かどうかへの打診は５月あたりから TA-net さん経由で行いました。

2023 年度実施に向けて関わった方々（敬称略）

舞台出演者チーム

演者
谷口直子
（Divadlo501）
岐阜県在住

舞台手話通訳
新納真梨子
（TA-net）
仙台在住

音響
佐竹厚美
仙台在住

手話通訳者の紹介

TA-net 理事長
廣川麻子（ろう者）

フラットフェスチーム

プロデューサー
及川多香子

制作
石澤佳奈

他多数

岐阜稽古チーム

舞台手話通訳監修
河合依子（ろう者）
（全日本ろう者演劇会議会長、岐阜ろう劇団いぶき代表、TA-net）

手話監修アシスタント、稽古時手話通訳
加藤真紀子
（TA-net）
高田美香
（TA-net）

※手話通訳は長時間続けて行えないので、２人で交代で通訳します。

仙台稽古チーム　※仙台の子ども達に向けた最終調整

舞台手話通訳監修
渡辺 敦生　（ろう者）
（みやぎデフキッズクラブ代表ほか）

手話監修稽古時の手話通訳
萩原彩子
（TA-net）
大平のり子
（TA-net）

2023 年
３月
フラットフェス開催決定！出演打診

→

2023 年
４月
出演決定広報開始

→

６月初旬
事業の採択通知

→

６月中旬
手話監修者、稽古時の手話通訳者の依頼

→

９月2日３日
岐阜での手話監修稽古

→

自主稽古

→

９月 15 日
仙台でのリハーサルの時に手話監修

→

９月 16 日
17 日
本番！

稽古や手話監修の予算はまだ未定・・・

助成により手話監修稽古が可能に

ヤッター！

Chatwork でやりとり

集合！

監修の方へは事前に台本や昨年の動画を共有しました

２日じゃ全然足りない💧

時間が許す限り調整は続く・・・

岐阜県で手話監修稽古

【岐阜稽古チーム】
俳優　谷口直子さん / 舞台手話通訳　新納真梨子さん
舞台手話通訳監修　河合依子さん
手話通訳　加藤真紀子さん　高田美香さん

本番の２週間前、谷口直子さんと監修の河合依子さんが住む岐阜県で稽古が行われました。
舞台手話通訳の新納さんは仙台から、監修アシスタントの加藤さん、高田さんは愛知からの参加です。
手話監修の河合依子さんにお話を伺いました。

「きんいろの髪のお姫さま」の手話監修担当は２回目です。
１回目は一昨年。当時、私はコロナウイルスに感染し、オンラインでの監修でした。
ただ、画面上では「見づらい」「修正方法が難しい」「気持ちも伝わってこない」という状況でした。
でも、２回目を昨年担当した際は、９月の初旬（本番２週間前）に新納さんに岐阜へ来てもらい、二日間（朝１０時半～１６時まで）の稽古を実施しました。
新納さんは１回目と比較すると技術の進歩を感じました。ただ「顔の表情」「手話の間」等、まだ改善の余地があり、さらに磨けばより進歩できると感じました。
また手話だけでは初見の方には分かりにくいかもしれないと私は感じていました。手話だけではなく、字幕も付与されていた方がもっと楽しく鑑賞できたのではないでしょうか。
そして、人形には表情がありません。例えば、王様が顔を出す際には、谷口さんがマントから手を出すので、「手話ができたらもっと作品性が高まるのでは」と考えています。

谷口さんに少し手話を覚えていただいて、王様だけでも良いので「命令」などいくつかの単語を手話で表すことで、十分に伝わってくるものがあると思います。
やはり、新納さんが谷口さんの隣に立ってひとり通訳するだけでは、もったいない。
例えば、悪い王様。これは動きがなくても人形の怖い顔を見るだけで充分に感じることができる。でも、そこから出ている手が動くことで、より怖さのある王様を演出できる。ぜひ演者も手話を覚えるのはいかがでしょうか。舞台手話通訳者ではなく演者が手話をやることで効果が増すこともあります。
そして、新納さんは「演劇の基礎」を勉強するのが良いと思いました。演技の経験があるのとないのでは、大きく差があります。抵抗がある方もいるかもしれませんが、やはり舞台手話通訳として活動するには、演劇の基礎を学ぶことが大切になってきます。
セリフは日常会話とは異なります。例えば､間。日常生活と舞台上では全く違います。
少しでも演技経験があれば、舞台に立った際に「この間なんだ」と気づくことができます。
また、今回の作品の観客は子どもが多いです。子どもに分かるよう、伝わるようにするには目が大切になります。観ている子どもを作品に引き込む力も、訓練を重ねればもっと身に着くと思います。
新納さんがこれからさらなる自己研鑽を積まれることを期待しています。

仙台での監修の様子

昨年はお客様として公演を観劇した渡辺敦生さんに手話監修をお願いしました。
事前に台本をお渡しし、伝わるところ、伝わりにくいところをメモしながらゲネプロを観ていただきました。終演後に車座になって伝えたい意図の確認と提案を話し合います。
岐阜での河合さんの監修も尊重しつつ、仙台で子ども向けに行う場合のわかりやすい表現を探ります。（手話の単語や表現も子どもがよく使うもの、大人の言い回し等あるのですね！）

【仙台稽古チーム】
俳優　谷口直子さん
舞台手話通訳　新納真梨子さん
音響　佐竹厚美さん
舞台手話監修　渡辺敦生さん
手話通訳　萩原彩子さん、大平のり子さん

効果音で「何かが起こった」
「場面転換して鬱蒼とした森の雰囲気になった」
などセリフ以外の音による情報も大きい。
「今、ここは森」「アリが登場」「カラスがしゃべってる」など場面状況を補足する言葉も手話で伝えると、よりわかりやすいですよ。
敦生さん

実際にやってみるとすごく伝わるのがわかる！
登場人物のキャラクターによっても動きや表情がまるで変わってきます。

２羽の鳥が騒々しく会話している様子なら、しゃべる・飛ぶを左右の手で交互に表すと２羽でピーチクパーチクしゃべってる感がでます！

公演当日を迎えました！

2023 年 9 月 16 日（土）12:30〜
9 月 17 日（日）14:00〜
宮城野区文化センター 2F リハーサル室

観客動員数
100 名

舞台にも仕掛けがたくさん！

効果音の一部は生演奏で、楽器を鳴らす様子もみせています

舞台写真撮影　Mari Odajima

「もしかして、お姫さまですか？」ベールをかぶった観客とのやりとりも盛り上がります

終演後に、子ども達が実際に人形や舞台にふれる時間を大事にしている谷口さん。

「この瞬間が美しいなといつも思うんです。公演が終わった後に子ども達が実際にお人形を触って、自分が見ていた世界に一歩近づく。物語に入っていく。その時の目の輝きというのが舞台を見ている時とまた違って・・・大事なことだなあと思います。」

アフタートーク（意見交換会）

2023.9.16「きんいろの髪のお姫さま」終演後にお客様とざっくばらんにお話する会を持ちました。話題を一部抜粋して記します。（敬称略）

谷口

ご来場ありがとうございました。昨年の岐阜での稽古時は、Zoom で手話監修を行ったのですが、今年は対面で２日間行い、みなさん演劇経験が豊富な方で、とても面白く質の高い、刺激的な二日間でした。

新納さんの手話を良くするためのアドバイスをいただくのですが、自分にも直結するものでとても参考になりました。新納さんは岐阜の稽古で、事前に準備してきたものをひっくり返されて大変だったと思うのですが、仙台で自主稽古して公演に挑んだ新納さんのすごさ。昨年と全然違うものになりました。

渡辺敦生
仙台
手話監修

去年実は、はっきり言うと、イメージがつかみきれずにわからないところもありました。今年は事前に台本をもらって初めてわかったシーンもありました。岐阜での指導もあり、仙台公演前に監修で少しお伝えして、迎えた今日の本番。非常に表現もよくなり、内容もよく理解することができました。がんばって去年より変化した新納さんお疲れ様でした。

ただ、個人の意見では、手話がわからない方もいて個人差があるので、手話が万能ではない。できれば、字幕もあるとさらに内容を深く理解できる人が増えるんじゃないかなと思います。

髙橋則子
仙台市
聴覚障害者
協会会長

前情報なく物語の内容もわからないまま拝見しました。

主人公の「イジー」以外の登場人物に名前があるのかどうかわからず（王様、お姫様の名前はなし）セリフが誰がいっているのかわからなくなるところがありました。

聞こえない人は、視覚的な情報が必要なので、手話がわかる人がみたらわかるかもしれないけど、手話がわからない人は雰囲気ではわからない。会話の流れなどをもっといい方法で・・・吹き出しみたいなのがあるといいな。

オノマトペってあるじゃないですか。例えば文字でシーン、バタバタ、トントン歩く音など漫画みたいに出てきたらもっと楽しめると思う。映像や文字が色を変えて出るとか、後ろに何か写っているのも楽しいんじゃないかな、そのほうがいろんな人が参加しやすいのではないかと思います。

吹き出し、アナログでやったら面白いですよね笑

大沢佐智子
舞台美術家

2016 年、TA-net の廣川さんが座・高円寺で開催した「舞台手話通訳つき公演のモデル上演および撮影会」で舞台美術をやりました。こちらは、舞台手話通訳ありきで１から作られた作品ですか？

谷口

いえ、2018 年初演で、私が１人でやる作品としてつくりました。
昨年、すんぷちょからの提案で手話通訳をつけたいという話で、初めての試みとして後から手話通訳をつけました。

大沢

聴覚障害がある方向けの舞台の工夫はありますか？

谷口

はじめは念頭においてなかったのですが・・・ご縁なんですけど、作品のもともとの演出の方は、チェコで聴覚障害者の方向けの演劇を作っている方で。

チェコでは聴覚障害の人の演劇というのが確立されていて、大学の中にデフの方が通う演劇の学科があるんです。その学科の教授の方で、私もチェコでその方が演出されている作品をみて、手話も混じっていて、お客さんは全員手話ができる人、拍手が手をひらひらしてて、私その時は手話を全然身近に感じていなかったので、客席でこう（ひらひら）なるとええ？と思って、これが拍手なんだ、とわかって。後から日本の手話の拍手も同じなんだ！というのをすごく感じました。

演出家の方は聴覚障害の有無に関わらず、子どもの為の作品をたくさん作る人。「情報を伝える」と言う意味で彼女なりの独特な視点があって、それが障害がある方にも伝わる、フィットする工夫に繋がっているのではないかと思いました。

だから聴覚障害者向けにつくっている作品でなくても「手話をつける」のはすごくあってるなというのは感じました。

転太
てんたん
人形劇場

手話通訳さん、音響さんとも融合してやれてる感じがいいですね。演者が人形とやりとりするのもとてもおもしろかった。

音楽はどう決めてるんですか？

谷口

音楽は全て私がつくっていて、１人の時は自分で音を出します。

頼まれた音響さんは音を出すきっかけがたくさんあるので大変だと思うんですけど、「ポチッとなと押してくれればいいから」という誘い文句でみんなを罠にはめてきました（笑）

転太

耳が聞こえてる状態でみてると、手話の動きや姿がおもしろかったり、音楽も音を出す様子を楽器を見せながら舞台の上でやるのが好きだなあと思って観てました。

佐竹

ボタンをおすだけねって言われてきて沼にはまった音響です（笑）

聞こえずらい方がどんなふうに感じるのか、まったくわからない状態でいました。去年、楽器の動きで音が出ていることがわかるということを伺ったので、見せるための配置を工夫したりしました。

谷口

前日稽古のときに、手話監修の敦生さんに「そこで音がはいってるの？」といわれた時に、聞こえる人は見て確認しなくても聞こえるから音の情報（波の音、暗い雰囲気など）がわかるけど、聞こえない方は楽器が動いたとて、何を表わす音なのか情報を得ることができない。そこを今まで無頓着に考えていたなということを感じました。

そこをどうやって伝えるかというのも、手話通訳の方にとってはすごく重要な要素だなと感じました。

大沢

新納さんもいち出演者、身体表現者として作品の中に存在して話が進行していく、こういう表現があるんだなと思いました。

谷口さんひとりで上演される時と、話は同じでも別バージョンの違う作品になる可能性があるんだ、と興味深く拝見させていただきました。

谷口

身体表現のことで岐阜稽古の時にすごく感動したんですけど、手話監修の河合さんとアシスタントのお２人がディスカッションしながら、こーしたほうがいいあーしたほうがいいって見せて伝えてくれるわけですよ。稽古中にそれぞれの書き方でメモして、実際のアドバイスで、言葉でうまく伝わらないときは「こうよ」ってやってみせてくださるんです。その時にロールシフト（落語のように役が変わる時に体の向きをかえる）って俳優の技術としても大事なことだと思うんですけど、手話では特にとても重要で何度もおっしゃってました。

監修の河合さんは舞台俳優さんで、「こうやって立つのよ。出発だ！」って指差して立つその姿が完全に役者の姿で、「やっぱりそうだな。こうでないと伝わらない。手話ってもともとそういう言語なんだな」とすごく思いました。現場で間近でみることができたのが良かったです。

谷口

聴者の私は手話が全然できないんですけど、手話って俳優の技術としてもすごく重要な要素をふくんでいる面白いものだなと感じました。稽古後にすごく勉強したいと思い手話サークルをネットで探しました。

私たちも手話のこと知らなさすぎるっていうのを今回すごくいろんなところで感じました。敦生さんが字幕をつけるとすごくよくわかるっておっしゃていましたが、字幕がわかるけど手話がわからない、手話はわかるけど字を読むのに難儀する人もいるっていう、その個人差が大きい、というのも今回初めて知りました。もっと知ろうとすることってすごく大事なことなんだな、というの感じたので、２年目ですごく良い体験を、もっと深められたなという感じがしました。ぜひ役者として手話は勉強しておくべきだなと感じました。

則子

普通の手話通訳者は終わったら手をお腹の前に置くのですが、舞台手話通訳はそれをやらずとても心情が伝わるのでよかったです。

新納

監修の時に「（手をお腹の前に置くのを）やらないで」と言われました。

ここで通訳者に戻っちゃうから、役者としてでてほしい。素にもどらないようにと。

通訳者

新納

台本を手話言語にかえるという作業が、今年の岐阜での稽古では、手話監修者に加え、舞台手話通訳経験者の目線がプラスされて翻訳通訳するというところで、昨年とは全く違うものが出てきました。

一つの作品をつくる想いや一体感が昨年以上で、岐阜の稽古でこりゃいかんとなりました。動画で記録を撮ったり、稽古後も足りなかった部分の補足をお願いしたり、本当にたくさんの方に支えられてこの作品ができたのだなあと思います。

もっと多くの、聞こえる聞こえない関係なしに、「こういう舞台があるんですよ」「みんなで一緒に観れる舞台があるんですよ」って広報していけたらなあと切に願っています。

「舞台手話通訳」というジャンルに人がいなくて、人が増えるのを切望します。岐阜に行った時にアシスタントのお２人が自分の意見を監修者にぶつけて「こーじゃないあーじゃない」って話してるのを見て、同じものを目指す仲間がいるってうらやましいなと思いました。今日手話通訳できてくださってるお二人（萩原さん、大平さん）も、TA-net の舞台手話通訳養成講座に参加した方で、もっと舞台や手話通訳に興味がある方に、「こういう世界があるんですよ」って広く知っていただきたいなって思います。

岐阜でも話したのですが、手話通訳者と劇団の２者だけじゃなくて、助成金とか行政と、お客さん。それらが十分にないと状況は変わっていかないのかなと。

表現の可能性についても盛り上がりました！

敦生

去年上野駅でえきマトペという実証実験があり、あれがすごく聾者のなかで評判がよかった。

則子

字幕はちいさい子どもがみると読めないかもしれないから、映像や模様で見るのもいいかも。

大沢

見え方のいろいろを試す実験の場があるといいですよね。

転太

感じ方も違っていろんな人がいるから、どの表現を見てる人がとるかわからないけど、どれをとっても「おもしろいな」「楽しめるな」「ここにいていいんだ」って感じられたら良いなと。手話だけじゃなく、吹き出しだけじゃないかもしれないけど、置いてけぼりにならない工夫があればいいなと思いました。

ブックレット製作にあたってあとがき

はじめ知識のなかった私は、合理的配慮をどこまで想定したらよいかわからずとにかく大変だ、という印象がありました。今年は自分の狭い経験であれこれイメージするよりも、直接当事者の方に話を聞く方がよっぽど早い、と気づけてよかったです。アーティストはもちろん、聴覚障害のある方や手話通訳者さんのアイディアや思いは、世界が広がるワクワクであふれていました。目からウロコがたくさん落ちて、実践の場で試したいことも増えました。

この小冊子が「舞台手話通訳つき」という選択肢が増えるきっかけになれたら嬉しいです。

製作にあたってご協力いただいた皆様ありがとうございました。

フラットシアターフェスティバル制作部／なの工房　石澤佳奈